

第22回 飯田女子短期大学学内研究集談会

Part 1 口演・報告

日時：平成30年2月14日(水) 9:00-11:55 会場：飯田女子短期大学視聴覚室

プログラム

- 9:00 開会の辞および挨拶
- 9:05 口演：長野県内の介護施設における移乗支援関連用具の普及に関する実態調査
..... ○村山真紀子・佐々木晃美・小笠原京子
- 9:25 口演：インシデントレポートを共有して得た病棟との連携 所澤好美
- 9:45 報告：高校ラグビー班との連携 富口由紀子
- 10:05 報告：小学生親子を対象とした「かむ意識を高める親子健康教室」の効果について
..... ○岩瀬彩香・友竹浩之・安富和子・
木下智恵子・竹村香・柴本むつ美
- 10:25 休憩(10分)
- 10:35 報告：テキスタイルアート・ミニアチュール5～100人の展覧会～
..... 田中洋江
- 10:55 報告：学校・家庭・地域と連携した咀嚼啓発活動の展開
ーカミンこうや家庭用小袋の開発ー 安富和子
- 11:15 口演・FD：卒業時における看護技術到達度の達成状況と今後の課題
..... ○原典子・鈴木真由美・山下梓・岩崎みすず
- 11:35 報告・FD・SD：キャンパスライフに対する学生満足度アンケート結果(平成29年度)
..... ○矢澤庸徳・渡邊千春・林正樹・稲吉政岳・
山口正之・桑原真裕子・岩崎みすず・北林ちなみ
- 11:55 閉会の辞

Pat2 展 示

日時：平成30年1月15日(月)-2月28日(水) 会場：飯田女子短期大学本館廊下掲示板

研究ポスター7点

口 演

長野県内の介護施設における移乗支援関連用具の普及に関する実態調査

村山真紀子・佐々木晃美・小笠原京子

1. はじめに

現在日本は、『介護離職ゼロ』を政策と掲げる一方で、介護現場の人材不足は社会的問題になっている。また、高齢者を対象とする介護施設での腰痛の発生件数も増加している。介護職の離職を防ぐために腰痛対策は重要な課題であり、早急に取り組むべき課題といえる。そこで本調査は、移乗支援関連用具の普及状況について、長野県内の実態把握を行った。また、この調査の結果を一資料にして、今後介護現場における具体的な腰痛予防対策を提案していきたいと考える。

2. 調査方法

- (1)質問紙：自記式郵送調査
- (2)対象者：長野県内の特別養護老人ホーム及び介護老人保健施設251施設
- (3)アンケート調査実施期間：
平成29年2月1日(水)～3月31日(金)
- (4)内容：①施設の地域、種別、居室形態、定員数、②移乗支援関連用具の活用状況、③職場定着支援助成金制度に対する認知度、④腰痛予防研修会の開催頻度、参加希望の有無、⑤他職種の介入
- (5)集計：単純集計
- (6)倫理的配慮：飯田女子短期大学研究倫理委員会の承認を得た。

3. 結 果

回答を得た施設は144施設(57.4%)であった。

(1)長野県内の移乗支援関連用具の普及状況

県全体では、何らかの用具が導入されている施設は90%以上であり、種類別ではスライディングボード、スライディングシートが全体の54.6%を占めた。南信は他地域と比較し

てボード、シートの導入率が高いが、リフト類は低い。活用状況は、県全体では入浴用リフトの活用率が高く、南信は導入率の高いボード、シートの活用率が高い。一方、用具はあるが活用していない理由としては、全体として「対象者がいない」が多い。また、必要な利用者の選定は、南信は介護職員が関与している割合が高い。

(2)助成金についての認知度と研修会開催状況

認知度は県全体では6割弱であり、「すでに活用している」事業所は全地域において2割前後で大差はない。研修会は、どこの地域も5割強は定期的に実施しており、1年に1回が最も多い。

4. 考 察

長野県全体として移乗支援関連用具があることは周知され、いずれかの用具は持っているが、個別性に応じた用具の活用の普及は不十分であると考えられる。南信地域のリフト導入率が低い点に関しては、安価でない点、使用スペースの問題の他、使用方法、利用者のアセスメントにおける知識や技術の不足も推察される。また、用具があるにも関わらず不使用である現状もあることから、福祉用具の安全な使用方法の伝達や具体的な効果の検証が必要である。

今後の課題として、利用者の適切なアセスメント方法及び用具を正しく安全に利用するための研修の機会を増やすことが挙げられる。引き続き、多職種と連携を取り合い、介護福祉士が主体性を持って用具使用に関われるような環境づくりが重要である。

5. まとめ

本学のある南信地域においては、まだ用具

の普及が十分だとはいえず、介護福祉士養成校の果たす役割は大きい。今後も「持ち上げない介護」の視点を持った技術の普及が必要

不可欠である。今回検証できなかった項目についてさらに調査を進めていきたい。

口 演

インシデントレポートを共有して得た病棟との連携

所 澤 好 美

I. 研究の目的

臨地実習における学生のインシデントの分析・検討を行い、そのレポートを病棟と共有したことで得られた対策を明らかにし、インシデントレポートを共有することの効果について考察することである。

II. 事例の経過

臨地実習最終日に実習病院の看護部長より、学生に対する投書を受け取った。投書には「学生が、受け持ち患者を頻回に訪室することが同室者の迷惑になっている」とあった。

すぐに教員は、実習病棟師長と臨床指導者に報告した。投書は匿名で学生氏名も無かったため、関係していると考えられるA患者・家族とK学生を推測し、K学生に内容を伝え、その日の夕方に、学生の受け持ちであるB患者とA患者を含めた同室者に、謝罪を含めた実習最後の挨拶をした。翌日に実習単位認定者、看護学科長に報告した。その後、K学生とインシデントレポートに沿って投書の日付までの実習内容・原因・対策について検討・作成し、学科長と実習単位認定者に提出し、実習病院看護部長、実習病棟師長・臨床指導者に検討内容を報告した。その後、実習病棟師長・臨床指導者から実習受け入れ側の再発防止策について返書を頂いた。

III. 倫理的配慮

関係者に、個人情報の保護に配慮すること

など、口頭で承諾を得た。

IV. 結 果

1. 投書までの状況

K学生は、胃全摘術後の90歳代のB患者を受け持っていた。A患者は成人期で症状が悪化していた。投書の日付までを分析した結果、A患者とB患者が同室で学生の関わっていたと思われる実習時間は、約10時間であった。

2. 学生と教員で検討した対策

【学生の対策】

- ・朝の環境整備時に同室者に挨拶をしながら状況を観察し、一日の行動に配慮する。
- ・訪室が頻回になる場合は周りの方の反応を見ながら訪室し、患者指導は患者の状態に合わせてなるべくディールームで行う。
- ・カーテンが閉まっている場合は、特に患者の状況に注意していく。

【教員の対策】

- ・学生の実習中の行動や思考を把握して、周囲にも関心を向けるように指導する。
- ・朝の環境整備時などに同室者への挨拶を行い反応を観察し、週に1～2回は同室者の方にも実習に対する意見を頂く。

3. 実習病棟で検討された対策

- ・臨床指導者は学生の受け持ち患者を選択し同意を得る際、同室者にも臨地実習の目的を説明し、学生が出入りすることに対して同意を得る。
- ・学生を担当したスタッフは、患者・同室者

に実習に対しての精神的負担がないかどうか確認し、学生指導を行う。

V. 考 察

学生と教員が振り返りを行う際に、実習が同室者に嫌な思いをさせてしまったことを再確認し、インシデントレポートの作成を進めた。分析の中で、同室者が投書をするまでの時間が約10時間であったことから、実習では、学生も教員も受け持ち患者に気持ちが集中してしまいがちなことに気づき、患者が

カーテンをしていることの意味や、同室者への気配りや配慮の必要性、多床室での学生のケアの提供の方法・指導のあり方など再確認できた。また、実習病棟が臨地実習を受け入れる側の対策を検討してくれたことなど、インシデントレポートを共有することで実習体制の整備に関して病棟と連携を深める事ができ、再発防止策が具体的に実践できることを実感した。今回の検討の中で「実習においても患者に安全・安楽な看護の提供をしていきたい」と目指す視点も一致していた。

報 告

「学校・家庭・地域と連携した咀嚼啓発活動の展開」

— カミンこうや家庭用小袋の開発 —

安 富 和 子

【背 景】

加工食品等の食べ物の軟食傾向により、嚙まなくても済む食生活の弊害として、子どもたちの顎が小さくなり、不正咬合等の歯並びや歯肉炎等の問題を持つ児童生徒が増加傾向にある。

学校給食においては嚙めない、嚙まない、飲み込めないといった食べ方に問題を持つ子どもたちの実態がうかがわれる。

【目 的】

子どもたちの咀嚼機能の改善と向上のため、炒り大豆の実践、かみかみセンサーの開発、かみかみ大使カミンの咀嚼啓発活動、かみかみりレーの提唱、カミンこうやの開発等を行ってきた。

しかし、咀嚼の効用は分かっているが、行動に移せず早食いになってしまう。咀嚼の意識の継続化が難しい等の課題が、子どもや教

職員、保護者から聞こえてくる。子どもたちが生涯にわたり健康な生活を送れるために、学校、家庭、地域が連携し、咀嚼の啓発活動を行っていくことが必要であると考える。

【方 法】

①かみかみ大使カミンの咀嚼啓発活動

②カミンこうや家庭用小袋の開発

③カミンの紙芝居の制作

咀嚼の啓発活動として、今年度行った①から③の活動について報告する。

①かみかみ大使カミンの咀嚼啓発活動

カミンは平成27年度にかみかみゼミから誕生し、3年目が過ぎた。今年度の主な活動は、かみかみりレー（千栄小・喬木第二小・なかよし保育園）長野県歯科医師会・下條村健康祭り・ゆるキャラinリング並木、本学の諸活動への参加等である。また、今年度の長野県ご当地ゆるキャラ総選挙（信濃毎日新聞社主

催)では、アルクマに次いで2位(昨年4位)になる等、様々な活動に参加することにより、多方面から協力をいただき、カミンの知名度が少しずつ上がってきているように思う。

②カミンこうや家庭用小袋の開発

平成28年10月1日に販売された業務用カミンこうやは、上下伊那の小中学校50校で給食メニューに提供された。同時に咀嚼の効用や大切さについてもお便り等で啓発してくれた学校が多かった。そのような経過の中で、子ども達や保護者から、家庭用小袋の販売を希望する声があがってきた。咀嚼の啓発にも効果的であると考え、旭松食品にお願いし、平成29年9月19日小袋の販売が実現した。

〔カミンこうやレシピコンテストの実施〕

飯田産業センター・旭松食品・本学家政学科の連携で、カミンこうやを使ったレシピコンテストを実施した。募集は下伊那地区の学校給食担当者、高校生、本学学生とした。10月1日に本学調理室で入賞者に集まってもらい調理実演会と審査会を行い、最優秀賞他5品を選び表彰した。結果は下伊那地区の学校

等に配布し、給食に反映してもらうようお願いした。旭松食品にはレシピ集の作成をお願いし、学校やカミンこうやの販売店に置き、配布する予定である。

③カミンの紙芝居の制作

低年齢からの咀嚼指導の重要性と、咀嚼の効用や食べる時の良い姿勢についての子ども向け視覚教材がないことから、保育園児から小学校低学年向けの紙芝居の制作に取り組んだ。「カミンのかみかみ教室」と「カミンの姿勢教室」である。保育園3園で実演し、良く噛むことを呼びかけた。

【結 果】

様々な咀嚼の啓発活動の継続により、地域の子ども達の咀嚼の意識は少しずつ高まってきているように思う。今後の咀嚼の啓発活動は、子どもから高齢者までの口腔機能の低下を予防するために、保・幼稚園、学校、地域、歯科医師会、栄養士会、歯科衛生士会、看護協会、介護支援専門員協会、食改等が連携して活動していくことが望まれ、重要になってくると思う。